# Ⅲ. まちづくりの目標

本章では、上位計画である第6次熊野町総合計画で示された将来像や目標人口を ふまえた上で、将来都市像やまちづくりの目標、将来都市構造について記載します。

- 1. 熊野町の基本理念と目指す姿
- 2. 将来都市構造

## 1. 熊野町の基本理念と目指す姿

## (1) 上位・関連計画における方針等

本計画の上位計画である『第6次熊野町総合計画』、関連計画である『熊野町災害復興計画』では、以下の方針等が示されています。

#### ① 第6次熊野町総合計画(令和3年3月策定)

#### ■将来像

## ひと まち 育む 筆の都 熊野

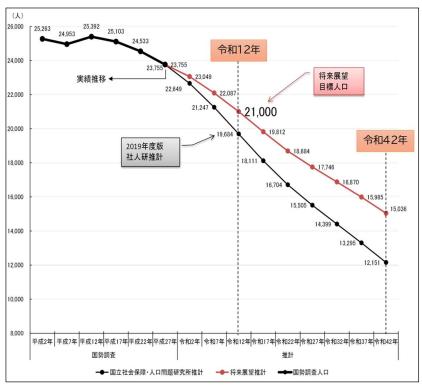
~なんかいい ちょうどいい そう想えるまちを目指して~

まちの主役は、ここに暮らすひと、ここで働くひと、ここで育つひと、一人ひとりです。 そんな、まちにかかわるすべてのひとが、まちを好きになり、協働でまちを盛り立ててくれる、そ んな関係を育てることが、まちの未来の可能性につながります。

- ○世界のブランドとして誇れる熊野筆
- ○通勤・通学に困ることのない住まいの立地
- 〇日常の生活に困ることのない利便性
- ○自然の中でのびのびと子育てできる環境
- ○学ぶ力と豊かな心を育む教育

そんな、「なんかいい」「ちょうどいい」という想いをもっと深めるために、町民との共生による信頼と連携を基本に持続的なまちづくりを進めることで、「なんかいいことが多いまち」「私たちの暮らしにちょうどいいまち」を実現します。

そうして、多彩な魅力のあるまちになるとともに、町民同士がつながり、周りの「まち」とつながり、世界の「ひと」とつながることで、さらなる「なんかいい」「ちょうどいい」そう想える「熊野」を目指します。



■ 将来人口目標

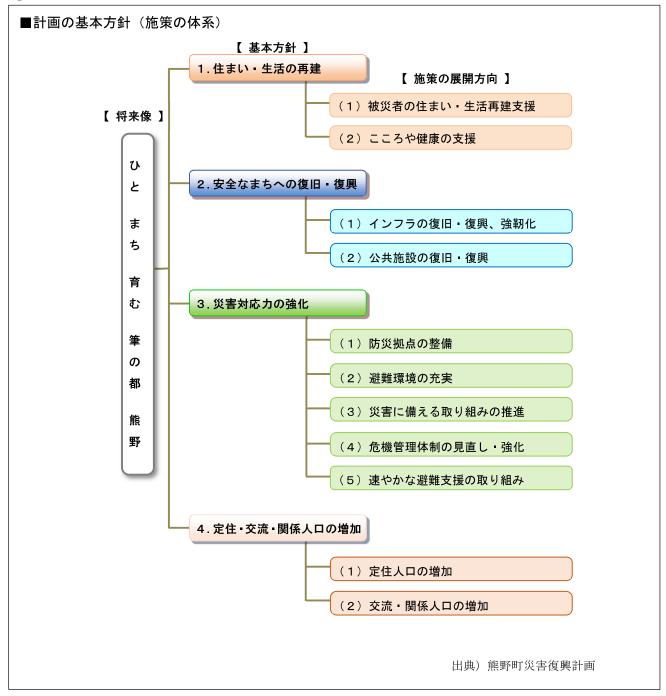
出典)第6次熊野町総合計画

#### ■目標人口

本町の人口は、平成27 (2015) 年までの国勢調査による人口動向をみると、平成12 (2000) 年をピークに減少に転じています。また、国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口によると、今後も人口減少が進み、令和22 (2040) 年には16,704人まで減少するという推計が示されています。

そうした人口動向を踏まえ、第6次熊野町総合計画では、将来像である『ひと まち 育む 筆の都 熊野』の実現に向け、令和12 (2030) 年の目標人口を21,000人と設定し、令和42年 (2060) までに1万5千人を上回る将来展望を目指すこととします。

#### ② 熊野町災害復興計画(令和元年9月策定)



#### (2) まちづくりにおける基本的な考え方

本町の総合計画におけるまちづくりの将来像である「ひと まち 育む 筆の都 熊野 ~なんかいい ちょうどいい そう想えるまちを目指して~」や、基本目標として掲げている「誰もが元気で健やかに暮らせるまち」、「学ぶ力と豊かな心を育むまち」、「活力と魅力に満ちた元気なまち」、「安心・安全で快適に暮らせるまち」、「人と自然が調和する美しいまち」、「自立と協働 みんなで創る持続可能なまち」を踏まえ、本計画では都市計画の観点、インフラやハード整備を推進・促進するにあたり、町民とまちづくりの共通ビジョンを描き、上位計画の将来像の実現に向け、将来都市像を掲げて、未来につながるまちづくりを目指します。

また、これらのまちづくりを進めるため、デジタル技術とデータなどを積極的に活用することで、 医療・福祉、商業、公共交通などの都市や地域が抱える課題の解決を図り、持続可能な都市経営を 実現するため、スマートシティの取組を推進します。

## (3) 将来都市像

# 筆にのせて 未来を描く まちづくり

#### ■主旨

本町のシンボルであり、町民の暮らしを支えてきた筆(宝)を大切にし、筆とともに町と 町民の夢(未来)を描くまちづくりを目指します。

これからのまちづくりは、人口減少や災害の激甚化、感染症の世界的な蔓延など、これまで経験したことのない社会経済情勢に対応しながら取り組んでいくことが求められます。

かつて、平地の少ない熊野村では、農業だけでは生活が苦しかった時代がありました。 そのような中、若い村人たちが当時筆づくりの進んでいた地域から技術を習い、筆づくり の技が根づいていったといわれています。その後も戦争による影響で生産量の落ち込みなど も経験してきましたが、幾度となく逆境を乗り越えてきました。

本町には、このように困難に立ち向かう底力があることを糧として、未曽有の事態においても、筆のように一本の筋の通った未来を描き、しなやかなまちづくりを目指します。

#### (4) まちづくりの目標

まちづくりにおける基本的な考え方を踏まえた将来像の実現に向けて、5つのまちづくりの目標 を以下のように定めます。

## 目標1:安心・安全で快適に暮らせるまちづくり(主に課題1・課題3・課題4に対応)

- ▶ 本町では、平成30年7月豪雨により町全域で土石流が発生するなど、甚大な被害を受け、現在も地域の復旧・復興を進めています。一刻も早く住み慣れた地域でこれまでの生活に戻れるよう、引き続き災害復旧事業を進めます。また、近年、多発する自然災害や発生が懸念されている南海トラフ巨大地震により、住民の防災に対する意識は高まっています。これらの自然災害による被害の防止・軽減を図るため、ハード整備とソフト施策一体となった取組を進めるとともに、社会のあらゆる関係者が協働して、被害軽減対策に取り組むことで、災害に強いまちづくりを目指します。
- ▶ 将来の超高齢社会の進展を見据え、ユニバーサルデザインの考え方を踏まえた高齢者や妊婦、乳幼児同伴者などが移動しやすい都市空間の創出を図り、誰もが安心して暮らせるまちづくりを目指します。

#### 目標2:コンパクト+ネットワーク型のまちづくり(主に課題1・課題2・課題3・課題4に対応)

- ▶ 本町は周囲を山に囲まれた盆地の中央にコンパクトな市街地を形成していますが、これまで経験したことのない早さでの人口減少や高齢化の進行により、まちの空洞化や地域コミュニティの衰退が懸念されています。特に、熊野団地は整備後50年以上が経過し、都市施設の老朽化や空き家の増加がみられ、居住環境への影響が懸念されています。このため、必要な都市機能の確保、空き家や低未利用地の有効利用、公共施設の適切な維持管理等を進め、快適に住み続けられる質の高いまちづくりを目指します。
- ▶ 本町では自家用車による移動が主な交通手段となっており、アンケート調査からも交通利便性に関するご意見が非常に多く、町内道路網に加え周辺都市との道路網の整備・維持が重要です。一方で、将来の超高齢社会の進展を見据え、過度に自家用車に依存しない交通ネットワークの強化も必要です。そこで、広域幹線道路の整備や公共交通の充実等により、周辺都市や町内の連携を強化し、誰でも円滑に移動できる都市を目指します。
- ▶ 人口増加に伴い山裾まで市街地が拡大した結果、土砂災害の危険性が高い区域に多くの住民が居住しているなど、災害に対して脆弱な都市構造となっています。このため、災害リスクの低い土地への居住誘導などにより、激甚化する自然災害に対して、誰もが安全で安心な生活を送ることができる都市を目指します。

## 目標3:活力・魅力満ちあふれるまちづくり(主に課題2・課題4・課題5に対応)

- ▶ 本町は、江戸時代から伝わる筆の製造を産業の中心として栄えてきた「筆の都」であり、筆の生産量は全国一となっています。町内には筆の製造所や筆にまつわる施設が点在しており、重要な観光資源となっています。また、農地や山林等の豊かな自然資源や、榊山神社をはじめ、伝統ある社寺等の歴史的資源も点在しています。これらの資源を、都市に魅力や個性を与える貴重な財産として積極的に保全・活用しながら、誰もが誇れる魅力あるまちづくりを目指します。
- ▶ 新型コロナウイルス感染症、国内において過度な人口・産業等の集中による感染リスクの顕在化により、外出自粛や人との接触機会の低減の必要性から、オンライン授業やテレワークが拡大するなど、人々のライフスタイルや価値観に大きな変化を与えています。本町は広島市・呉市・東広島市のトライアングルの中央に位置する利便性の良さに加え、周囲を山地に囲まれた自然環境を併せ持つ利点を活かし、住み働く場として、密集、密接、密閉を避け、人と人との物理的距離を保つ「新しい生活様式」に対応した、ゆとりある良好な居住環境の形成を目指します。
- ▶ 本町は平成30年10月1日に町制施行100周年を迎えました。永らく形成されてきた地域のコミュニティを今後も大切にするとともに、本町ならではの資源を求めて来訪していただける方々には、今後も本町と関わり続けていただけるようにニーズを的確に把握し、交流人口の増加を目指します。

#### 目標4:人と自然が調和する美しいまちづくり(主に課題1・課題2・課題5に対応)

▶ 水辺や里山・田園風景を形づくる森林や農地は、熊野の財産として次世代に引き継いでいくことが 重要と言えます。また、町内にある公園や緑地は住民の憩いの場としてだけでなく、災害発生時の 避難場所や都市生態系の保全等に寄与しています。こうした豊かな自然をまちづくりの重要な要素 として都市と一体的な活用を図り、都市と自然が共生する魅力あふれるまちづくりを目指します。

#### 目標5:住民主体のまちづくり(主に課題1・課題4・課題5に対応)

▶ 地域の個性を生かした魅力的なまちづくりを実現するためには、まちづくりの担い手として住民が 自発的にまちづくりに参加することを促進し、主体的にまちづくりを行う人材の育成と活躍できる 環境の整備が必要です。そのため、これまで以上に住民、事業者、行政と協働・連携によるまちづ くりを推進します。

## 【まちづくりの課題】

## 課題 1

平成30年7月豪雨の教訓を 生かした災害に強いまちづくり

## 課題2

社会動向に応じた 土地利用の適切な誘導

#### 課題3

地区内道路の改善と 広域交通ネットワークの強化

#### 課題4

良好かつ持続可能な 居住環境の形成

#### 課題5

自然環境の保全の推進と 公共空間の活用・管理

## 【まちづくりの目標】

#### 目標1

安心・安全で快適に暮らせる まちづくり

※主に課題1・課題3・課題4に対応

#### 目標2

コンパクト+ネットワーク型の まちづくり

※主に課題1・課題2・課題3・課題4に対応

## 目標3

活力・魅力満ちあふれるまちづくり

※主に課題2・課題4・課題5に対応

## 目標4

人と自然が調和する美しいまちづくり

※主に課題1・課題2・課題5に対応

## 目標5

住民主体のまちづくり

※主に課題1・課題4・課題5に対応

## 2. 将来都市構造

## (1) 基本的な考え方

- ○本町の地域特性や行動圏域をふまえ、「西部地域・中央地域・東部地域」の3地域4区分に設定します。地域ごとに中心となる拠点を配置し、それらを効果的・効率的に連携し、コンパクト・プラス・ネットワークのまちづくりを推進します。
- ○地域ごとに中心となる拠点として、中央地域に「都市拠点」を、西部地域及び東部地域に「地域 活動拠点」をそれぞれ配置します。
- ○周辺市町との連携を図るため、本町の交通ネットワークを支える2つの連携軸を配置します。また、町の基幹産業である筆産業の振興とまちづくりとの連携を促進するため、筆の里工房周辺から町役場周辺に「筆の軸」を配置します。
- ○本町は周囲を山々に取り囲まれ、山麓に田園集落が広がり、中心部には市街地が形成されています。このような都市構造を今後も守りながら、環境負荷の低減や市街地拡大の抑制、産業振興、良好な居住環境形成など、ゾーンごとの特性・役割を生かした持続可能なまちづくりを推進します。
- ○将来の人口推計に応じて、適正な規模の都市形成を図っていく必要があります。将来の都市構造 の再編にあたっては、住民の理解と合意が前提となります。そのため、長期的な観点から、安全 性、利便性、快適性に配慮しながら、安心して住み続けられる都市づくりを目指します。

## ■地域区分と拠点の位置



## ■コンパクト+ネットワークの都市空間イメージ



#### (2) 拠点の設定

町民の日常生活を維持し、多様な都市活動を支えるため、重点的に整備や保全・機能維持を図っていく拠点として、以下の拠点を設定します。

#### 都市拠点 | 町役場を中心とする商業地一帯

隣接市町との広域的な連携・補完関係の構築も考慮しながら、出来庭から萩原までの商業地・ 公共公益・観光・文化・医療・福祉等の都市機能の維持・集積を図るため、町役場を中心とする 商業地一帯を地域生活の利便性の向上を図る「都市拠点」として位置づけます。

#### 地域活動拠点|熊野団地周辺、深原地区公園周辺

身近な地域における日常生活と地域活動を支えるため、くまの・みらい交流館、くまの・こども夢プラザ、西部地域健康センター等の位置する熊野団地周辺及び熊野東防災交流センターから東部地域健康センター・深原地区公園周辺をそれぞれ地域コミュニティの核となる「地域活動拠点」として位置づけます。

## 産業拠点 │ (一) 瀬野呉線バイパス沿線、深原地区、くまの産業団地

町の産業振興・雇用創出を促進するため、計画的な基盤整備を推進するとともに、周辺の豊かな自然環境との調和を図る地区として、(一) 瀬野呉線バイパス沿線や深原地区、くまの産業団地を「産業拠点」として位置づけます。

みどり・文化の拠点 | 深原地区公園、筆の里工房周辺、町民グランド周辺、呉地ダム、都市緑地人・文化・緑とのふれあいの場として整備・保全・維持・活用を図るため、深原地区公園、筆の里工房周辺地区、町民グランド周辺、呉地ダム周辺及び自然環境良好な都市緑地等を「みどり・文化の拠点」として位置づけます。

## (3) 軸の設定

町内外の交通ネットワークを支えるための2つの連携軸と、筆の都を特徴づける"筆の軸"を以下のとおり設定します。

## 広域連携軸 │ (主) 矢野安浦線、(主) 呉平谷線、(一) 瀬野呉線、

## (主) 矢野安浦線バイパス、(一) 瀬野呉線バイパス

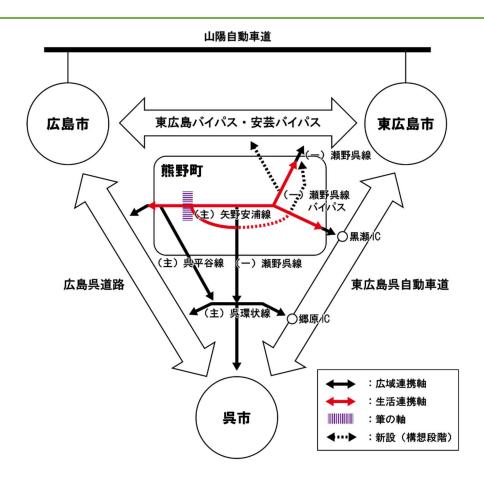
広島市・呉市・東広島市等の主要都市との連携を支える道路整備の促進、バイパス機能の充実により、広域交通の強化を図り、周辺地域との都市機能の連携を推進するため、(主) 矢野安浦線、(一) 瀬野呉線バイパスなどを「広域連携軸」と位置づけます。

#### 生活連携軸 | (主) 矢野安浦線、(一) 瀬野呉線

本町の都市軸である(主)矢野安浦線、(一)瀬野呉線を「生活連携軸」と位置づけます。これまでに培われてきた市街地空間を基調として都市機能の充実を図るとともに、相互を連絡する道路強化により厚みのある都市空間の育成を図ります。

#### 筆の軸

筆の里工房から中心市街地を通り、良好な自然緑地をつなぐ軸を「筆の軸」として位置づけ、 文化的資源を活用した歩道や修景整備を行い、熊野筆の歴史や文化を体験できるみちづくりを図 ります。



## (4) ゾーンの構成

市街地・集落と自然環境の共生を支えるため、都市的エリアと自然的エリアの棲み分けを保持し、「山なみゾーン」、「田園集落ゾーン」、「住工芸共生ゾーン」、「住環境保全ゾーン」を設定し、それぞれの位置づけに応じた人口密度の維持や環境の保全・形成を図ります。

#### 山なみゾーン

地球環境への負荷を軽減できるように、環境を保全していくとともに、農業・林業・観光業等の産業振興につなげるため、安芸アルプスをはじめとする山なみがつくるスカイラインの維持や、山林、農地等の資源の活用を図るゾーンを「山なみゾーン」に位置づけます。

#### 田園集落ゾーン

田畑・樹林地等の農地と農家住宅等で形成される集落一帯など、農業集落と調和のとれた良好な田園環境の形成を図るゾーンを「田園集落ゾーン」に位置づけます。

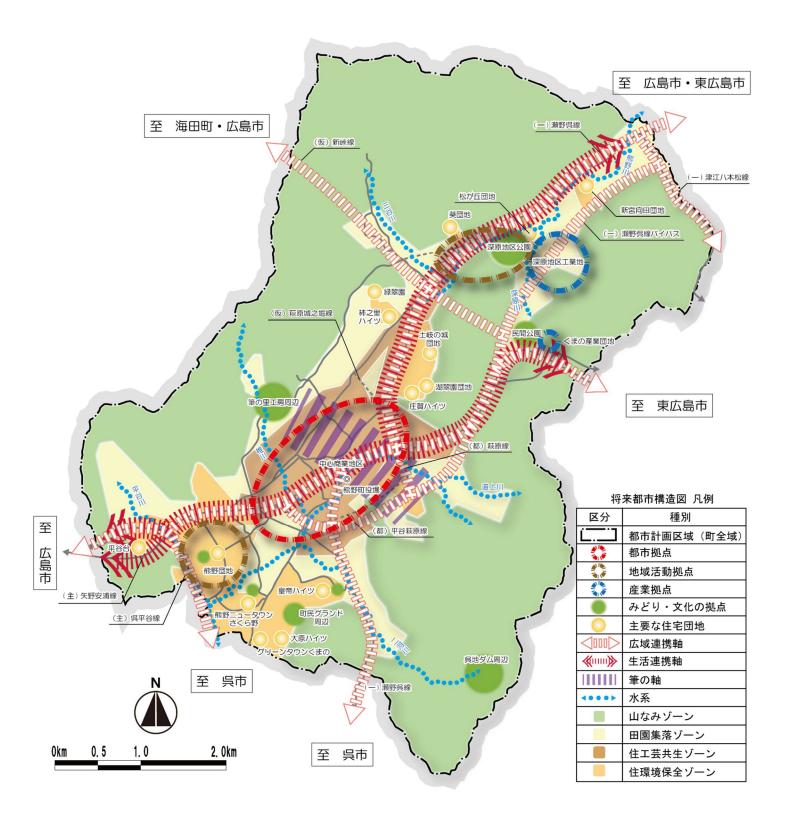
## 住工芸共生ゾーン

町の基幹産業である筆産業の育成と、良好な田園景観と調和した住宅地の保護・育成を図るゾーンを「住工芸共生ゾーン」に位置づけます。

## 住環境保全ゾーン

主に団地が形成される地区など、専用住宅地としての良好な住環境の保護・育成を図るゾーンを「住環境保全ゾーン」に位置づけます。

## ■将来都市構造図

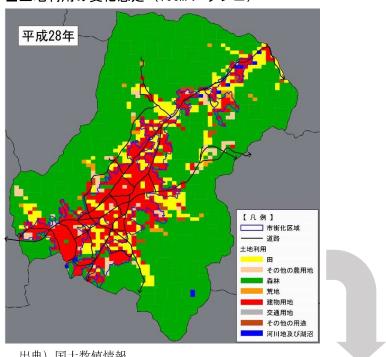


## (5) 将来都市構造の再編プロセス

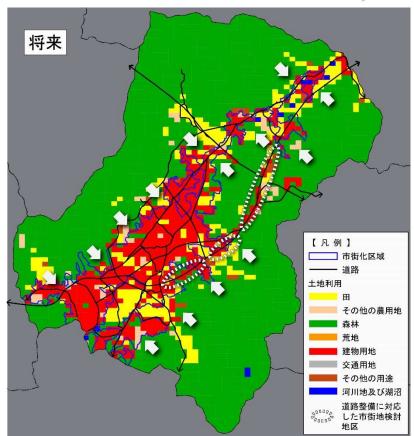
長期的には、防災上の不安が高い斜面地に近接して立地する住居については、安全な市街地への 住み替え・移転を促進します。( \_\_\_\_\_\_)

また、(一) 瀬野呉線バイパスや(主) 矢野安浦線バイパス等の計画中の幹線道路沿線は、周辺 の土地利用との調和を図りながら、計画的な市街地誘導を図ります。( $\frac{20000}{20000}$ )

## ■土地利用の変化想定(100m メッシュ)



出典) 国土数值情報



(※)将来の土地利用メッシュは、計画 中の道路整備を想定し、沿道の宅 地の増加や、防災上の不安が高い 斜面地に近接した宅地の減少を意 図して作成したイメージであり、 将来推計をもとに想定したもので はない。